

# イギリスにおける食糧危機とその克服

武 田 久 義

## 目 次

- 一. は じ め に
- 二. 食糧危機の背景
- 三. 食糧危機への対応と克服
- 四. む す び

## 一. は じ め に

本稿は、16世紀頃にイギリス社会を混乱におとし入れ17世紀後半頃に終息に向かったと言われている、食糧危機とその克服についての考察である。当時のイギリスにおける産業の中心は、農業であった。商・工業は次第に発展しつつあったとはいえ、主要な産業と呼ぶにはほど遠い状態であった。そして、社会を指導していた階層は地主であった。しかし、イギリス社会にも、変化が生じてきていた。その背景となった主なものは、科学や技術の発達と、大陸ですでに起こっていたルネサンスや宗教改革に代表される人々の思考や意識の変化であった。これらは直接・間接にイギリスの政治・経済・社会に影響を及ぼし、イギリス社会を徐々に変化させつつあった。すなわち、その後に関起こった大変動のための序曲が奏でられつつあったのである。それは、精神面においては中世のカトリックの世界観に対する変革の兆しであり、物質面においてはマナー（荘園）の解体を現実化する様々な変化であった。そ

---

キーワード：食糧危機、共同体、食糧増産、救貧政策、工業化

してそれは、人々の精神的、物質的生活を根底から支えていた共同体の解体となってあらわれた。

このような社会的状況のもとで寒冷化に襲われたとき、大量の貧民が発生することは避けられなかった。そしてひそかに進行しつつある変化を顕在化させた大きな契機、それが食糧危機ではなかっただろうか。食糧危機という巨大なリスクに対して、社会は様々な対策を講じた。それによって、17世紀中頃には社会は食糧危機を一応乗り越えることはできた。しかし、この課程において生じた様々な変化は、基本的にその後の社会を大きく変える原動力となった。そのような変化の中の最大のものの一つが、工業化であったと思われる。

本稿においては、最初に食糧危機の背景についての大雑把な考察を行う。食糧危機の原因となるものが純粹に天候不順等の自然現象だけでないことは、よく知られている。すなわち、当時のイギリスにおいても、食糧危機の原因として寒冷という気象条件によるものと、社会経済的原因によるものとがあったのである。ここでは、後者の背景を中心に簡単に見ておく（第二節）。次に、食糧危機に対するいくつかの取り組みについて考察する（第三節）。

本稿が対象とする時期は、食糧危機をとにかくも克服することができたとされている17世紀の中頃までである。それ以降イギリス社会は、慢性的な貧困に苦しむことになる。そして貧困問題に対応して、「救貧法」が一定の役割を担わせられることとなる。しかし、イギリス社会の貧困問題は、基本的に工業化によって解決をはかられることとなるのであるが、17世紀以降の貧困という巨大なリスクとそれへの対応については、別の機会に取り上げたいと考えている。

## 二．食糧危機の背景

### （一）

食糧危機の直接の原因は、寒冷による作物の不作である。しかし、不作、凶作そして飢饉等による危機が単に自然的条件にのみによって生じるもので

ないことは、多くの歴史が教えてくれるところでもある。人々の窮乏は、自然的条件と社会的条件が結びついたとき、最も深刻となるものである。ここでは、寒冷という自然的条件によってより深刻度を増した食糧危機の社会的背景について、考えてみたい。

12世紀になると、「賦役耕作義務」の「金納化」があらわれはじめた。その頃のイギリスの農村では、マナー単位の自給自足の経済が行われていた。そこでは、地主と隷農という、基本的に二つの階級が存在していた。隷農は、一定の期間を地主のための耕作等の労働に従事する義務があった。しかし、お金を支払うことで賦役耕作義務を免除されるという方法は、その後のイギリス社会を大きく変える重要な原因となった。しかしそのような方法が顕著となるのは、14世紀になってからである。すなわち、イギリスの人口が三分の一から半分に減少したといわれる1348年から1350年におけるペストの大流行によって、農業労働力が大幅に不足したからである。そこで農民の圧力によって、あるいは農民の他地域への流出を阻止するために、賦役耕作義務の金納化が促進された。しかし、マナーの崩壊が本格的となるのは、14世紀中期以降である。ワット・タイラーの乱（1381年）に代表される農民の反乱以後農奴制の崩壊は顕著となり、16世紀末までにイングランドの農奴制は消滅した。そしてそれまでの隷農は農奴から解放され、解放された隷農は多くの小さな地主（ヨーマン）や自由労働者等になった<sup>1)</sup>。

農奴制が終わると、地主たちは労働賦役の義務を負わなくなった小作人を追い出した。そして、定期借地制と賃労働が始まった<sup>2)</sup>。すなわち、荘園の直営地経営はもっぱら日雇労働に依存するようになった<sup>3)</sup>。そして、農業労働者の賃金が高騰した場合には、土地を定期借地として貸し出すようになったのである。このような過程において、向上の道を辿る農民層のうちからそ

---

1) このほか、商工業者や船乗りになる者もいた。今井登志喜、『英国社会史(上)』、1953年、東京大学出版会、134頁。

2) クリストファ・ヒル、浜林正夫訳、『宗教改革から産業革命へ』、1970年、未来社、66頁。

3) 大塚久雄、『近代欧州経済史序説』、1969年、岩波書店、226頁。

の上層として、裕福かつ独立の精神に富むヨーマンが誕生する。そして、ヨーマンのうちのある者は「領主の直営地を、ある者は共有荒蕪地から近ごろ囲い込まれた新耕地を借り受け、またある者は昔からの開放耕地の地条をゆずり受けた。そしてある者は穀物生産に、ある者は羊を飼って羊毛の生産に、またある者は兼営農業に従っていた」<sup>4)</sup>。彼等は、農村の中産階級を構成した。そして中には、資本主義的農業経営者として成長していった者もいたのである。

このようにして封建的マナーは解体するのであるが、これとほぼ同時期に農村には工業が発達してきていた。ここで農村工業の発達と、それに関連するエンクロージャーについて簡単にふれておこう<sup>5)</sup>。

最初、羊毛の生産国であったイングランドは、14世紀中頃までには「羊毛」の生産国であり、かつ輸出国となっていた<sup>6)</sup>。すなわち、イギリスは原料輸出よりも羊毛製品の輸出国へと飛躍していたのである。毛織物業の発達に伴って生じた第一次エンクロージャーの運動は、はやくも14世紀には起こっていた。すなわち、前述した賦役耕作義務の金納化にともなって封建的マナーは崩壊し、農業の労働力を賃金労働者に依存していたのであるが、労賃が高い場合には直営地の経営が困難となる。そこで、地主の中には農地を羊の飼育のための牧草地とするものもあった。農地を牧羊のための土地に転換することで、経費を大幅に低下させることができたからである。すなわち、「かつて20人の耕作者を雇ったところが、いまやただ一人の羊飼で事たり、しかも羊飼は農村労働者のあらゆる階層のうち最低賃銀であった。そこで牧羊に強い魅力が生じたことはあきらかで、その利潤は農耕に比してはるかに大き

---

4) トレヴェリアン, G. M., 藤原浩・松浦高嶺訳, 『イギリス社会史(1)』1971年, みすず書房, 14頁。

5) エンクロージャーとは、従来一年の全部または一部にわたって共同権が存在していた土地を、かきねその他の境界標識でかこみ、共同権を排除し、私有地であることを明示することである。(小松芳喬, 『英国産業革命史』, 昭和27年, 一條書店, 225頁。)ここでは、主として16世紀に行われた「第一次エンクロージャー」のみを対象とする。

6) 大塚久雄, 前掲書, 173頁。

かった」<sup>7)</sup>。そして、それまでの農民の共有地を囲い込んだり、さらには耕地も囲い込んだのである。

一方、羊毛生産の急速な発展と石炭産業の発展によって、農民が農村から移動していったり、労働者化が進行していた。このように、13世紀末から15世紀にかけての中世後期の全過程を通してみると、最も重要な現象として、一般的には①領主経済が「生産者経済」から、寄生的な「地代取得者経済」へ変化した、②農民層が顕著な発展を示し、生産諸力の発展が決定的に農民経営に移行したことが指摘されている<sup>8)</sup>。そして、筆者は、農村工業が展開しつつあったことを付加したい。農村工業は、必然的に農民の労働者化を促進したのであり、本稿のテーマである食糧危機に対処する主要な手段の一つとなったからである。

## (二)

食糧生産の基礎となる土地と人口との関係をきわめて大雑把に見るならば、おおよそ次のように言うことができるだろう。すなわち、13世紀には人の割には耕地が不足していた。しかし、14、15世紀には黒死病によって人口が激減し、土地が過剰となった。そしてまた、16世紀になると、人口は増加し労働力が過剰となった<sup>9)</sup>。すなわち、16世紀中頃から17世紀前半にかけてのイギリスは、気象による穀物の不作だけでなく、一般的にみて人口増大が食糧生産に追いつかないという状況でもあった。

よく知られているように、16世紀末は寒冷期にあたり、不作と凶作が頻繁に発生した。そして大飢饉となることもあった。穀物価格を指標として食糧危機を見た場合、次の年ないし年代をイギリスの食糧危機と見ることができる。すなわち、飢饉と見られるのは、1520年代、1557年、1588年、1597年、1623年、1649年<sup>10)</sup>である。このほか、飢饉にまではいたらないが、凶作とし

7) 新井嘉之作、『イギリス農村社会経済史』、1959年、お茶の水書房、190頁。

8) 岡田与好、『イギリス初期労働立法の歴史的展開』、1961年、茶の水書房、21頁。

9) トレヴェリアン、前掲書、102頁。

ては1622年、1624年そして1630年等がある。以上のように16、17世紀のイギリス社会は、断続的な食糧危機に襲われていたのである。そして、物価騰貴が食糧危機をさらに深刻なものとしたことは、当然であった。

そして、16世紀になると一般に「貧民」と呼ばれる人々が発生するのである。これについて見ておこう。

16世紀の物価騰貴の原因として、一般的にはアメリカからの銀の大量流入が指摘されている。しかし、アメリカの銀がヨーロッパへはいつてこないうちから、物価はすでにあがりはじめていた。ヒルは、次のように記している。「その当時の人々も一部の歴史家も、価格騰貴の責任を、地主による搾出地代や鑄貨の改悪や戦争の経費に（少なくとも部分的に）帰している。価格がもっとも急速に上昇した1540年代と1590年代とは、戦争の時期であった。人口の増大と食糧需要の増大も、信用機関の発展や退蔵貨幣の放出、板金の溶解、教会や礼拝堂の装飾やミサの費用という形で固定されていた資金の流通化とともに、やはりその一因となった」。そして、1530年と1640年との間にイングランドの物価水準は5倍上がり、小麦の価格は6倍上がったのである<sup>11)</sup>。

また、トレヴェリアンはおおよそ次のように記している。16世紀のイギリスを、物価騰貴が襲った。1510年から1540年頃、ドイツの銀の生産が増加したこと、そしてヘンリー8世がヘンリー7世の蓄えた財宝をばらまいたことによって、食料品の価格が30パーセント上昇した。そして1541年から1561年にかけて、ヘンリー8世による貨幣の品質低下により、そしてややおくれてアメリカの銀鉱山の影響により、100パーセント以上の物価騰貴が起こったと言われている<sup>12)</sup>。

このようななかで、大量の失業者が発生するのであるが、その原因となったものは様々であった。まず、前述した耕作地を牧羊のための牧草地に転換

---

10) 常行敏夫、『市民革命前夜のイギリス社会』、1990年、岩波書店、52頁。

11) クリストファ・ヒル、前掲書、97頁。

12) トレヴェリアン、前掲書、103頁。

することによって生じる過剰労働力の削減に伴う失業があった。またマナー等においては、物価騰貴等によりそれまでの奉公人や召使い等を維持することができなくなるところも少なくなかった。解雇された者の多くは、失業者となってあふれ出た<sup>13)</sup>。さらに、修道院と付属礼拝堂が解体され、奉公人等が失業者となった。このほか、30年戦争等から帰還した兵士等も失業者となった。また、1550年代以降、毛織物工業の不振に伴い、大量の失業者が発生した。事実、「代表的な農村工業である毛織物工業それ自体が大量の失業者の温床となっていた」<sup>14)</sup>。

このように、生活を維持する基盤を持たない人々が多数発生したのである。

### 三．食糧危機への対応と克服

当時のイギリス社会においては貧困、とくに食糧危機は最大の問題であった。そこで、このことに対してどのような対策がとられたのであろうか。以下、簡単に見ておくとしよう。

#### (一) 人口抑制

15世紀後半以来、人口は着実に増加していた。また、「16世紀には大陸やウェールズやアイルランドから多くの移民がイングランドへわたってきた」、  
「人口増加はおそらく1630年代にいたるまで急速」<sup>15)</sup>であった。

人口増加は、一面では生産の増大に結びつく。しかし、食糧不作のときには、深刻な危機となる可能性を持っていた。これへの対応として、16世紀の半ば頃から、結婚と出産に対する制限によって人口の抑制をはかろうとしたことが指摘されている<sup>16)</sup>。

---

13) 継続するインフレに悩む貴族は従者の数を削減せざるをえなかったが、危機的な時代であった1590年から1620年の間に一家族平均100人から40～50人へと劇的な削減がおこなわれた。(常行敏夫、前掲書、115頁。)

14) 常行敏夫、同書、115-119頁。

15) クリストファ・ヒル、前掲書、52, 98頁。

16) 常行敏夫、前掲書、24頁。

## (二) 食糧の増産

全体的にみて農業の改良が行われた。これは、伝統的な穀物生産地域においても見られたが、主としてそれまで耕作がなされていなかった牧草、森林地帯において顕著に見られたものである。

それでは、食糧危機に対処して、具体的にどのような農業の改良がなされたのか、簡単に見ておこう。ここでは、従来耕作がなされていなかった地域を対象に考えてみたい。たとえばアーデンの森地域の五つの教区<sup>17)</sup>においては、穀草式農業（レイ・ファーマーミング）と施肥による農業改良、そして穀物生産のための囲込みによって穀物の生産を増大させた。そして増大した生産を、春穀である大麦やオート麦等の大衆のための穀物生産にあてたのである。

穀草式農業とは、土地を耕作地および牧草地に交互に利用する農業の形態である。牧草地として利用された土地は、一般に肥沃度が高い。アーデンの森地域においては、それまで牧草地として利用されていた土地を耕作地に転換したのであるが、さらに生産性を高めるために泥灰土や石灰を用いて土壌の改良を行っている。穀草式農業によって牧草地や森林等が耕作地となり、耕地は大幅に増大したが、鉄工業等の燃料需要等も森林から耕地への転換に一つの役割を果たしたと言えるだろう。なお、穀草式農業は16世紀後半から17世紀前半にかけてイングランド全域に普及したと指摘されている<sup>18)</sup>。また春穀は、ちょうど食糧が無くなる時期に収穫ができることから、食糧不足を補うことにおおいに役だった。

また、伝統的な穀物生産地域においては、泥灰土や石灰を用いて土壌の改良がなされた。そして、牧草地の耕作地への転換がなされたほか、穀物生産のための囲込みも行われた。そして増大した生産を、春穀の生産にあてた。

このほか、牧畜の形態を肉牛生産から酪農生産に切り替えてもいる。酪農による生産物は、比較的短い期間で果実を得ることができる。また、自家消

---

17) トレヴェリアンは、当時のアーデンの森について、「深い森で、牧夫がまばらに住むだけであった」と記している。（前掲書、124頁。）

18) 常行敏夫、前掲書、70-71頁。



費ばかりでなく、販売される可能性もある。このように、酪農は食糧危機に対してかなりの効果を発揮したのではないと思われる<sup>19)</sup>。

### (三) 他の地域への移動

伝統的な穀物生産地域に特徴的なことは、凶作や飢饉等の食糧危機の過程で富める者と貧しい者への二極分化が生じたことである。食糧危機を解決するための農業改良の展開過程は、同時に、新しい階層の台頭による新たな社会・経済的秩序を農村社会に生み出す過程でもあった。すなわち、一般に、不作は2－3年続く傾向が強い。このため、多くの中規模農家は破産を避けられなくなる。しかし富裕な農業経営者であるヨーマン達は、この過程で土地を手放す農民の土地をかき集め、経営を拡大していった<sup>20)</sup>。また、ヨーマン達は、定期借地によっても耕作権を拡大していった。このように、食糧危機の危機克服過程は資本主義的農業を経営する富農の形成が小農民を排除する形で進行した過程でもあり、社会は二極に分化していったのである<sup>21)</sup>。

一方、前述したように、マナー等においては、物価騰貴等によりそれまでの奉公人や召使い等を維持することができなくなるところも少なくなかった。彼らの多くは、失業者となってあふれ出た。また、修道院等の解体によって多くの奉公人等も職を失い、そしてかつての戦役からもどってきた人々等、生活を維持する基盤を持たない人々が多数発生した。そして、それ以前には貧民の扶養に関して大きな社会的役割を担ってきた修道院の解体によって、貧民を扶養することが困難となってきた。そして、結果的には、貧民がその地域から流出するという現象が生じたのである。そして「彼らは、土地と仕事のない地域（典型的には伝統的な穀物生産地域）から近隣の都市あるいは入会地と農村工業が存在する森林・牧草地への移動を繰り返しながら、イングランド全体としてみれば、貧しく賃金の低い北・西部から豊かで賃金の高

19) 常行敏夫、同書、58頁以下。

20) 常行敏夫、同書、88頁。

21) 常行敏夫、同書、63-64頁。

い南・東部に移動する巨大な「浮浪民」(vagabonds)の群れを作り上げていったのである」<sup>22)</sup>。つまり、彼らの移動先の一つは、広大な未耕作地域が存在する牧畜地域ならびに森林地域であった。しかし、それだけではない。かれらは、都市へ向けても移動していったのである。佐藤清隆氏は、都市郊外の「酒場」について述べているなかで、「長距離移動がピューリタン革命以前の下層社会のなかで一般的な現象だった」と記している<sup>23)</sup>。

ところで、19世紀初めの数十年間まで、放浪はもともと労働者が遍歴しながら新しい仕事を探す方法として認められていた<sup>24)</sup>。そして、放浪は慣習的に認められていたのである。しかし後に見るように、これに対する規制がなされるようになった。

#### (四) 貨幣の品質上昇等による物価の抑制

チューダー時代の物価騰貴には、次の三つの段階があった<sup>25)</sup>。

- ①1510－1540年。ドイツの銀生産がふえ、またヘンリー7世のたくわえた財宝をヘンリー8世がばらまいたために、食料品価格が30パーセント上昇した。他の物価はそれほど上がっていない。
- ②1541－1561年。ヘンリー8世の貨幣品質低下のため（またややおくらてアメリカの銀山の影響があらわれはじめて）あらゆる物価が100パーセント以上も急騰した。
- ③1561－1582年。メアリー女王の財政改善とエリザベス女王の貨幣改鑄によって物価は安定し、その上昇は以前より緩慢になっている。なお、ステュアート朝初期に、アメリカの銀山が再び物価を騰貴させ、1643－1652年に頂点に達した。その後は、物価は下がっている。

エドワード6世の摂政ノーサンバランド伯は、1551年に通貨改革を行った。

22) 常行敏夫、同書、114頁。

23) 二宮宏之編、『結び合うかたち』、1995年、山川出版社、35頁。

24) デイヴィッド・スーデン、山森芳郎・山森喜久子訳、『ヴィクトリア時代のイギリス田園生活誌』、1997年、東洋書林、205頁。

25) トレヴェリアン、前掲書、103頁。

しかし、それから10年後、エリザベス朝の通貨安定までには、なお曲折があった<sup>26)</sup>。エリザベス1世は、即位後直ちに貨幣改鑄の準備をし、1560年に法令を出して、一定期間後には在来の貨幣は無効になることを規定した。そしてそれまでに旧貨を新貨と交換することにした。9カ月間でこの交換は終了し、旧貨はほとんど姿を消したと言われている<sup>27)</sup>。

#### (五) 救貧政策の実施

16世紀の前半頃、イングランドにおける富の三分の一は教会の手中にある、という見方がある。これだけの富が教会や修道院に集中していたがどうかはともかく、これらは、毎日、貧民に金銭や残飯を施していた<sup>28)</sup>。そしてこれが、貧民に対する一種の社会政策的機能を果たしていたことは、間違いない。そして16世紀になるまで、貧民の救済は基本的に教会、修道院、個人の慈善等によっていた<sup>29)</sup>。

しかし、ここに大きな変化が起こった。すなわち、すでに述べたように、修道院が解体されたばかりでなく、マナーの解体、多数の軍人や奉公人の解雇等に寒冷化が重なって、多数の失業者や貧民が発生したのである。そして大量に発生した無産貧民の多くは、当面は新しい状態で労働することができない浮浪者、乞食、盗賊等となった<sup>30)</sup>。そしてこのような状況の中で、貧困が全体の問題として意識されるようになったのである。

ここでは、主として一般に「救貧法」と呼ばれている一連の法律・規則等を参考に、貧困問題への対処について考えていきたい。食糧危機という観点

---

26) 越智武臣、「ヨーロッパ経済の変動」(岩波講座『世界の歴史』(14)、1969年、岩波書店所収)、136頁。

27) 今井登志喜、前掲書、186頁。

28) トレヴェリアン、前掲書、44頁。

29) 礼拝堂の廃止は、一種の社会保障を貧民から奪った。また1660年までは、貧民は国家からよりも個人の慈善からはるかに多くの扶助を受けていた。(クリストファ・ヒル、前掲書、68頁。)

30) 「乞食とごろつきは16世紀のイギリス社会の特色であった。」(田代不二男、「エリザベス朝の救貧行政の研究」(『社会事業』第39巻3号所収)

からした場合、後に見るように初期の救貧法が基本的に農業労働者を確保し、ひいては食糧危機に対応しようとしたとも考えられるからである。

まず、救貧法の前史と言うことができる「労働者規制法」について簡単に見ておこう。同法が、後述する「職人規制法」とともに、食糧危機に対処するために農業労働者を確保するための広範な対策の一つと考えることも可能だからである。すでに見たように、12世紀頃から徐々に進行しつつあった賦役耕作義務の金納化が14世紀半ば頃から本格化してきていた。これによって、農奴制が解体しつつあったが、この過程で発生したペストの大流行による農村人口の激減に対処して、1349年から51年にかけて「労働者規制法」が制定された。同法は、狭義には1349年勅令と51年制定法の統一的呼称であるとともに、広義には1563年の「職人規制法」によって廃止された全労働立法の総称的呼称である<sup>31)</sup>。

「労働者規制法」が制定された段階で、すでに貧困問題は存在していた。そして貧民への対処はなされていた。しかしそれは、乞食への施与を禁止すること、すなわち働かない者を強制的に農業労働者として働かせるというものであった。このような背景をもって制定された「労働者規制法」は、次の四つの条項から成っていた。すなわち、労働者を土地に縛り付ける「強制就労条項」、雇い主に縛り付ける「契約条項」、農業日雇労働者と手工業者の職種別の法定最高賃金を規定する「賃金条項」、食料品およびその他の生活資料を合理的な価格で販売すべきことを定めた「価格条項」である<sup>32)</sup>。

つまり「労働者規制法」は、マナーの崩壊、領主の生産者経済の危機への対応を基本としており、農業労働力の確保が主眼としていたと考えられる。そして「労働者規制法」は、貧民層（「身体壮健な」零細土地保有農民）に対して強制された<sup>33)</sup>。このように、14世紀に制定された「労働者規制法」は、

---

31) ここでは、「労働者規制法」を狭義に用いる。なお「職人規制法」は、「労働者規制法」にかわる新たな労働立法として制定された。（岡田与好、前掲書、15頁。）

32) 常行敏夫、前掲書、26頁以下。

33) 岡田与好、前掲書、25-28頁。

農業労働力を確保するとともに、抑圧的なかたちで貧困問題に対処していたのである。しかしその後の「救貧法」においては、若干の変化が生じる。そこで、救貧制度の歴史を簡単に見ておこう<sup>34)</sup>。16世紀の後半以降、以下に見るように、多くの救貧法が制定されている。まず、主な救貧法の制定を年代順にあげてみよう<sup>35)</sup>。

- ・ 1531年 労働能力のある貧民と労働不能の貧民とを区別した。そして、労働能力の無い者には許可状による物乞いを認めた。
- ・ 1536年 労働能力の無い貧民を救済する資金を各教区が自発的な方法で募るべきこと、また、貧民の子供には仕事を与えて教えるべきことを規定した。同法においては、萌芽的な形ではあるが、①乞食の禁止と労働不能貧民に対する施与と救済、②合法的な就労の意欲なき「身体壮健な悪党および浮浪者」に対する懲罰と並んで、③労働意欲ある失業貧民に対する「就業機会の創出」、④貧民子弟に対する徒弟就労強制という、初期救貧法の中心的課題が「救貧税」の強制賦課規定を除いて提起されるに至った。
- ・ 1552年 労働能力の無い貧民の救済基金のための教区単位での週募金を制度化した。
- ・ 1555年 豊かな教区が近隣の貧しい教区を支援することを追加した。
- ・ 1563年 救貧費用の負担を強制化した。(同年には、「職人規制法」も制定された。)
- ・ 1572年 浮浪民のカテゴリーを規定した。また、救貧税の課税を教区に義務づけるとともに、救貧行政の運営について規定した。働く能力のある貧民のうち浮浪民と認定すべき様々なカテゴリーは、次のとおりであ

34) 主として常行敏夫，前掲書，119頁以下を参考とした。

35) 当時の産業立法でもある救貧法の嚆矢は、1531年というのが通説となっている。そして救貧法が法体系として完成したのは、1567年法においてである。そして1597年から1601年にかけてのエリザベス立法によって、最終的な形態が整えられた。なお、1495年から1601年までに13本の「救貧法」が制定されている。(バイアー，A. L.，佐藤清隆訳，『浮浪者たちの世界』，平成9年，同文館，370頁。)

る。それらのカテゴリーの中には、①土地あるいは親方を持たない者、②賭博師、③辻占師、④貴族のお抱えではない芸人や音楽師、剣術師、熊いじめ師などの大道芸人、⑤鋳掛屋や小商人などの職業に従事する者、⑥慣習的な賃金で働くことを拒否する農業労働者、⑦許可状なく物乞いするオックス・ブリッジの学生、許可状のない兵士・船員、釈放された囚人で許可状をもたずに物乞いした者、などが含まれていた。これらの中にはこれまで述べてきた浮浪化しやすい身分・職業、あるいは浮浪化した人々が露命をつなぐために従事する一時しのぎの仕事がすべて網羅されていると言って良い<sup>36)</sup>。

- ・ 1576年 住民に対する課税や募金によって、貧民に仕事を与え、仕事に応じた賃金を支払うことを規定した。そしてこの失業対策のために、「矯正労役所」(house of correction)を設置することを規定した。「矯正労役所」の主な機能は、貧民の子供達に仕事を覚えさせ、彼等に労働規律を植え付けることであった。
- ・ 1598年 失業対策のための公共事業の実施を全教区に拡大すること、そして教区を救貧行政の责任单位としそれに貧民監督官があたることを規定した。労働能力の無い貧民に対する「救貧院」(almshouse, hospital)を建設することを義務づけ、物乞いを完全に禁止した。また、同年には「浮浪民規制法」も制定されている。すなわち、1598年に成立した「浮浪民規制法」は、1572年の法律が定めた「浮浪民」のカテゴリーを継承したうえで、彼らは鞭打ちの刑に処せられた後に最短距離で出生地に強制送還されるべきこと、出生地では働く能力のある者は仕事に就けられ、働く能力のない者は「救貧院」に収容されるべきこと、働く能力があるにもかかわらず仕事に就こうとしない怠惰な者は「矯正労役所」に収容されるべきことを規定し、これらの規定を実行するために「矯正労役所」

---

36) 「絶対王政の全時代を通じて、労働立法に規定されている労働条件で就労を拒否する日雇労働者は「浮浪者」Vagabond とみなされた」。(岡田与好、前掲書、36頁。)

の建設を全州・全都市に義務付けたのである。

・1601年 1598年法の修正を行い、救貧体系を確立した。

以上のように、「救貧法」において貧民への対策が、一応の前進をとげていることを見ることができる。そして1601年のいわゆる「エリザベス救貧法」の完成は、同時に浮浪民規制行政の完成でもあった。

「エリザベス救貧法」は、貧民を、貧困な児童、労働不能者、非自発的失業者、そして怠惰な貧民等の四つに分類し、それぞれに異なる取扱いをした。すなわち、貧民を労働能力を有する者とそうでない者に区別したのである。ここには、すでに貧民を労働力として活用するという考え方が、萌芽的にはあるが存在している。しかし「エリザベス救貧法」は、貧民を取り締まるという社会秩序の維持を主要な目的としていたのであり、生産力的観点は第二義的であった<sup>37)</sup>。

以上見てきたように、貧困問題は、とくに16世紀以降、全体にとって大きな問題であった。そして絶対王政においては、基本的に貧困問題は農業に関連してとらえられていた。すなわち、貧民を農業労働力として使用することであった。事実、土地への拘束を嫌って移動する農民、そして彼等は貧民とならせられるのであるが、そしてまた、他の職業へ移る者等が大勢存在していた。彼等を農業労働者として使用すること、そして農業を発展させること、これが貧困問題への基本的対処であった。例外的に、農村、都市に必要な職種における職人の徒弟を認めたが、基本的には、農民を農業労働者として強制的に働かせるというものである。そしてこれと同時に、労働能力を有しない貧民については、基本的に教区の責任において彼らを保護しようとするものであった。なお、保護が全く不十分なものであったことについては、ここでは立ち入らない。

---

37) 「1620年代より以前には平均して4年ごとに凶作の年があった。高齢者や病人に最低生活を保障することによって、貧民救済は飢饉の年には餓死と反乱を防止し、また資金を低くしておくのに役立った」。救貧法は基本的に治安維持のための法律である。(クリストファ・ヒル、前掲書、68頁。)



しかし、おおよそではあるが、17世紀の後半以降、このような農業中心的思考は変化する。農業労働力の確保が無視されるわけではないが、基本的に工業における労働力を確保し、労働能力のある者を強制的に工業の労働者として働かせ、工業の繁栄の中で貧困問題の解決をはかろうとするのである。そしてこれは、イギリス社会を必然的に工業化へと導くものであった。なお、17世紀後半以降の救貧政策については、別の機会に論じたいと思っている。

#### (六) 工業化

14世紀の中頃以降イギリスが毛織物の生産国となっていたことは、すでに述べた。そして、毛織物工業は15世紀末から16世紀中頃にかけて、はっきりとマニュファクチャの姿を取り始める<sup>38)</sup>。

ところで、毛織物工業は、最初から「農村工業」の姿をとって進行した<sup>39)</sup>のであるが、毛織物工業が農村に発達した一つの理由として、ギルド規制があった。すなわち工場は、ギルド規制が強い都市をのがれて、ギルドから自由な農村へつくられたのである<sup>40)</sup>。そして、毛織物業に付随して、諸種の道具・刃物・容器等の金属工業が農村へと広がった。このようにして、15世紀末から16世紀中頃までの間に、毛織物工業を基軸に、たとえば石炭のような重要な産業部門が次々に創出されることとなったのである<sup>41)</sup>。

そして農村工業地帯には数エーカーの小さなエンクロージャーが行われ、毛織物業者たちはこれに立地して農村小親方となった。そしてこれが浮浪者を吸収することもあったのである。すでに述べたように、一方では大エンクロージャーによって大量の浮浪者が発生していたが、このような場合、未成年者は中産的生産者のもとに徒弟として採用されることもあった。3人の徒弟に対して一人の雇い職人を採用することを、「職人規制法」は規定してお

---

38) 大塚久雄，前掲書，249頁。

39) 大塚久雄，同書，179頁。

40) クリストファ・ヒル，前掲書，105頁。

41) 大塚久雄，前掲書，251-257頁。



り<sup>42)</sup>、農村工業は失業者の救済に一定の役割を果たしていたのである。このように、農村工業の発展が農民生活の向上に寄与したことは、当然であった<sup>43)</sup>。また、失業した農民の流出先の一つは農村工業であったと言われている<sup>44)</sup>。

ところで、イギリス毛織物業が好景気と厳しい不況に見舞われたことは、よく知られている。16世紀の前半には好況を謳歌した。しかし後半に入ると、ときおり好景気を迎えるものの、17世紀の40年代まで、ほぼ一世紀に及ぶ長期的な停滞に見舞われたのである。そして毛織物輸出の好不況が、国民経済のうえにドラスティックな影響を与えた<sup>45)</sup>ことは、間違いない。そして、このことが貧民の救済において大きな影響を及ぼしたことは、明らかである。当時としては未だ、工業化のみによって貧民が救済されるには至っていなかったのである。

したがって、不況の時期には、農民、労働者、そして貧民と呼ばれた多くの人々は、次に述べる様々な手段でもってこれに対応してきたものと思われる。

#### (七) そ の 他

食糧危機に対して実に様々な方法で人々がこれに対応してきたことについて、ヒルは次のように記している。「1580年と1617年の間に「紡ぎ女」という言葉が未婚の婦人という近代的な意味を持つようになった」<sup>46)</sup>。農民の妻子は、毛織物産業で副収入を得ていたのである。また、「かなりの程度まで農民がみずからの食糧を生産し、自らの飲物を醸造し、みずからの衣類を紡いで織り（あるいは自分の家の動物の皮を着）、みずからの家を建て、自らの燃料をあつめていたということは事実である」<sup>47)</sup>。つまり、当時の農民に

---

42) 大塚久雄、同書、249頁以下。

43) 常行敏夫、前掲書、62頁以下。

44) 大塚久雄、前掲書、243頁。

45) 越智武臣、前掲論文、126頁。

46) クリストファ・ヒル、前掲書、98頁。

あつては「自足自給」的な要素が未だ残っていたこと、そして家計を補うために家族が様々なことをしたのである<sup>48)</sup>。

このほか、広義の慈善的活動もひろく行われていたようである。後のヴィクトリア時代に関するものであるが、田園の邸宅で、借地人たちは中世の習慣よろしく施しをうけた<sup>49)</sup>。レディー達は村の老人たちや下層階級の家庭を訪問し、助言を与えると同時に食事や衣服、金子を配った。また、貧しい労働者階級は、救済会、衣服の会、石炭の会、靴の会等を組織した。必要に応じて雇い主に申し出れば、大方その支援が受けられた。そのほか、大邸宅では、多くの男女に雇用の機会を与えた。そしてこのようなことは、おそらく当時もかなり一般に行われていたであろう。「地所を所有すれば、それ相応の責任があるということがヴィクトリア時代の公理であった」という考えは、当然、中世以来継続していた考えだからである<sup>50)</sup>。

地主に代わって新たに台頭してきた階級によっても、救済がなされた。当時、何らかの扶助を受けていた貧民のうちの14分の13を扶養していた慈善施設の圧倒的多数が貧民の最大の雇用主である商人の経費によるものであったと、指摘されている。「イングランドが組織的な慈善の制度をととのえたのは、商人たちが富裕になり、慈善事業をするだけの社会的影響力をもち、しかもなおこの問題を公の手にゆだねて安心していられるほどには国家の支配に参加していない、そういった世紀だったのであり、それはまた人々が死者にミサを与えることをやめ、生きている人々の自立を助けることが美德であると考えようになった世紀でもあった」<sup>51)</sup>。また、当時は落ち穂拾いは、貧しい人々の古くからの権利の一部とみなされていた<sup>52)</sup>。

---

47) クリストファ・ヒル、同書、99頁。

48) クリストファ・ヒル、同書、78頁。

49) 以下の記述は、ディヴィッド・スーデン、前掲書、41頁以下を参考とした。

50) トレヴェリアンは、次のように記している。「ステュアート時代初期には、村民の世話は自分達の義務だと認めているスクワイア（筆者注．郷土）の妻が多かった。時には、貴族の夫人にもそう考えた者があり、……」（トレヴェリアン、前掲書、97頁。）。

51) クリストファ・ヒル、前掲書、70頁。

また、耕作地の貸し付けも行われた。1 エーカー（約0.4ヘクタール）が5人家族を養う最適規模であった。これで、ジャガイモや他の野菜を栽培するほか、豚1頭と若干の鶏、アヒルを飼うことができた。また、民家では、ほとんどが庭に野菜を植えた<sup>53)</sup>。

以上に見るように、ノブレス・オブレッジは依然健在である。そして共同的要素がかなり強く残存していることがうかがえる。社会は、このようなものによっても、危機に対応していたのである<sup>54)</sup>。

このほか食糧危機に対しては、工業化に伴う生産性の上昇による果実をもって、他の凶作の影響を受けていない地域、あるいは外国から食糧を購入することも行われた。トレヴェリアンは、次のように記している。「ある一地方が凶作の場合には、イングランドが不作でないかぎり、仲買人の手を経て他の地方の余剰を買うことができた。全国が不作という場合は多分十年に一度のことで、そのときにはかなりの量が外国から輸入されたであろう」<sup>55)</sup>。

以上、食糧危機というリスク、そしてその克服策について大雑把に見てきた。およそ考えられるあらゆる方法がとられていたようである。イギリスの食糧危機に関して常行敏夫氏は、16世紀の中頃に速度を増した人口増大とともに深刻になり、16世紀末にピークに達したが、その後、深刻さを減じながら次第に地域的な現象になっていったと言う。そして、17世紀の中頃までには解決されたと推定している<sup>56)</sup>。その根拠として、人口が微増を続けていた1640年代に穀物価格が下降傾向を見せ始めていたがそれは、穀物供給が改善したことを示すこと、17世紀後半以降は穀物輸出国に転じていること、そして、同時代人の証言や1621年の議会における発言等をあげている<sup>57)</sup>。

52) デイヴィッド・スーデン、前掲書、136頁。

53) デイヴィッド・スーデン、同書、65-66頁。

54) 当然ながら、様々な備荒貯蓄がなされてきたことは間違いない。

55) トレヴェリアン、前掲書、123頁。

56) 「食糧危機は、早ければ1620年代までに、遅くても1640年代までに解決した。1649年にも飢饉が発生したが、それは北西部に限定されていた」。(常行敏夫、前掲書、52頁。)

このようにしてイギリス社会は、17世紀中頃には、食糧危機というリスクを克服していたのである。

#### 四. む す び

中世末期にイギリスを襲った食糧危機、そしてその背景と対応について大雑把な考察を行ってきた。食糧危機の直接的な原因は、寒冷化であった。しかし、危機をより深刻なものとしたのは、マナーの崩壊、修道院および付属礼拝堂の解体、エンクロージャーによる耕地の現象、多数の失業者の発生等であった。そして筆者は、この現象の基礎にあるものを端的に「共同体の解体」ととらえたい。そしてその結果として、大量の無産貧民の発生と食糧危機という現象が生じたのである。

このような事態に直面して、人々は様々な対応を行った。そのなかには以前の共同体において見られたものと類似したものも数多く存在していた。ある程度の組織的な救貧政策もなされた。しかし、新しい対応手段の一つとして、工業化とそれによる生産性の向上によって食糧を購入する方法がとられた。このような様々な方法によって、食糧危機は17世紀の中頃には、一応克服することができた。

ところで筆者は、不安に対処する行動が人間のあらゆる行動の根底の一つをなしていると考えている。食糧危機という最大の物質的不安に対してとられた様々な手段の中で、工業化による生産性の向上が追求された。そしてこの方法は、その後の社会に最も大きな影響を及ぼすものとなった。イギリス社会はこの食糧危機の克服過程において恒常的な貧困という新たな問題に直面することとなったのであるが、これへの対処としてより一層の工業化が促進されたのである。工業化による生産性の上昇によって不足品を購入するた

---

57) 「すべての農業経営者 (farmers) は豊作と価格の安さを嘆いている。数年前までは粗末なライ麦パンで満足していた貧しい人々が、品質の良い小麦を求めて市場を歩いている」という証言、そして、議会におけるジョン・スミスの「イギリスの農業は (飢えの) 恐れから我々を解放した」という発言である。(常行敏夫、前掲書、40頁以下。)

めであったが、工業化は後に産業革命という歴史上の大転換をもたらす一つの要因ともなったのである。それだけではない。この生産性の上昇により他から必要な物を購入するという方法は、その後の社会における物質的なリスク対策の基本の一つとなったのではないかと思われる。そしてそれは、ひいては製品の特化と農産物における特定の商品作物・換金作物の生産を促進し、その後に生じた多くの問題の一つの原因ともなったのではないか。本稿は、このような問題意識を有しつつも、考察の範囲を本格的な工業化が始まる以前の段階にとどめている。そして、考察の対象を食糧危機というリスクおよびその対策に絞っている。

すでに筆者は、中世末期から近代初期における精神的变化について若干の考察を試みている。(拙稿、「近代初期のイギリスにおける精神的不安に関する一考察」(『桃山学院大学経済経営論集』, 2002年3月第43巻第4号所収) 本稿は、前稿と対をなすものである。これらの二稿において、筆者が追求しようとしたものは、中世から近代にいたる精神および物質上の不安と、それに対する取組みについてである。筆者は、これらの取組みの中から近代という人類史上における大転換を実現させる大きな原因が形成されたのではないかと考えている。すなわち、食糧危機の克服過程において展開していた工業化がその後の貧困という新たな危機に対応して、さらに進展する。一方、中世共同体の崩壊によって引き起こされた深刻な精神的危機は、宗教改革の中で一応乗り越えられる。そしてそれは、近代精神の中で新たな展開をとげる。このような物質的、精神的変容が一つとなって、近代という新たな世界の形成を促したということである。今後の研究課題としたい。

(たけだ・ひさよし／経営学部教授／2002年7月2日受理)

## The Food Crisis in England in 17th Century

Hisayoshi TAKEDA

In 16th century, the weather of England was cold, and the people were suffered from the food crisis. It is true that the misery of the people were caused by bad harvest from bad weather, but some conditions such as breakup of the monor, over population, rising prices and a large number of jobless people were in the background.

The people took all possible steps against the food crisis. And one step that they introduced then was industrialization. They bought foods by the profits through industrialization. And around the middle of 17th century, though for the present, they have escaped from the food crisis.

The author has a opinion that industrialization has become a main style to cope with the suffer from poverty which has been a cronic problem in England after that.